〈巻頭言〉

外国の幼児教育施設の名称

岩崎　次男

母親学校について　外国語の邦訳のむずかしさについてはよく言われることであるが、外国の制度や施設の名称の邦訳も大変困難である。

フランスの代表的な幼児教育施設は、école maternelle であるが、これは往々「母親学校」と訳される。この訳語から受ける印象は、母親の学校、つまり、母親を対象とする学校か、あるいはせいぜい母親が教育にあたる学校ということではあるまいか。そこで、私は「母性的学校」と邦訳することを、機会あるごとに主張したり奨めたりしているが、なかなかあらためられない。

今から三百五十年以上も前、ヤン・コメンスキーは彼の著書『大教授学』の中で、六歳以下の子どもの教育を「母親学校」Schola Materna と呼んだ。この呼称が今日のフランスの école maternelle につながっているのではないかと、私は思うのであるが、コメンスキーのそれはまさに文字どおり、家庭で母親が中心になって乳幼児の教育にあたるという意味であるから、「学校」という言葉に問題が残るにしても、「母親学校」と呼んでよいであろう。ところが、今日のフランスの école maternelle は、小学校教員と同じ免許状をもつ教員が幼児の教育にあたる公的学校である。そこで求められる教育の特色は、母性的な心づかいをもって教育にあたることである。そう考えるならば、「母性的学校」と邦訳することがより適切であるように思われる。

幼児学校について　イギリスの infant school に

ついても、「幼児学校」と訳すことにためらいを感ずる。私自身もそう訳してきたが、今日の infant school は五歳から七歳までの児童を対象とする。この時期の児童を「幼児」と呼んでよいのであろうか。

なるほどロバート・オーエンがはじめてつくった infant school は、一歳から六歳までの幼児を対象としようとするものであった。この場合は、「幼児学校」でよいであろう。しかし今日の場合、それはどう呼んだらよいであろうか。「幼年学校」がよいであろうか。その名称はかつての陸軍の学校のそれと同一であるから、複雑な気持ちにさせられる。

幼稚園について　大学生の答案の中で、しばしば「幼稚園」というところで「幼児園」と書いたものに出会った。中国では、実際そう呼ばれているようである。

幼稚園はドイツ語の Kinder-Garten からきている。その創設者フリードリッヒ・フレーベルは、これを就学前の幼児の教育施設として考えたのであるから、「幼児園」というのはよいであろう。また、幼稚が幼児を意味するなら、「幼稚園」でもよいであろう。しかし今日、幼児の意味で幼稚を使うことは稀になっている。

ところで、「幼稚園」という言葉で、わたしたちは情緒的に子どもたちの花園と理解しがちではなかろうか。フレーベルは、第一に、その教育の原理が栽培の原理をベースとすべきであるという意味で、第二に、ここには子どもたちが生活に必要な植物を自主的に、また協同で栽培する畑があるべきであるという意味で、庭という言葉を使ったのである。

幼児教育の制度や施設の名称に問題意識をもちながら、その歴史的始源や歴史的経過について考えてみるのも、重要なことであると思われる。

（埼玉大学）